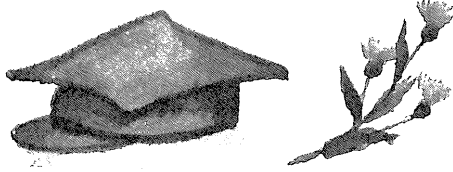


学力検査科目をめぐる確執(1)



名古屋大学教育学部教授

佐々木 享

5教科5科目自由選択制で出発した大学入試

大学入試では学力検査の重みが知れわたっているのに、学力検査の教科・科目をどうするか、どうなるかはいつでも重要な論点のひとつとなってきた。昨今もその例外ではない。

文部省は、新制大学の発足にあたりその入試の学力検査については、この連載第15回でも少し紹介したように、国語、社会、数学、理科、外国語の5教科にわたり、社会、数学、理科についてはそれぞれ1科目を自由に選択させる方式、つまり5教科5科目自由選択制で実施するよう指導した。その際大学・学部によってはいくつかの教科を省いてもよいとしていたので、私立大学では3～4教科程度を課す大学が多く、なかには1～2教科しか課さない大学もあった。国公立大学の場合には、4教科しか課さなかった極めて僅かな大学をのぞき、ほとんどすべての大学学部が5教科にわたって出題した。学部によって検査科目数をかえる措置をとる大学もなかった。国公立大学に関する限り、学力検査の教科・科目は文部省の指導そのままに実施されたといえるわけである。

初期——ここでは1949、1950年度——入試の特徴のひとつは、社会、数学、理科、外国語の

ようにその教科に属する科目が複数ある場合には、その教科に属する科目の全部を出題して、試験場に臨んでから受験生に自由にその中から1科目を選ばせたことであった(いわば機械的にこの方針どおりに実施した東京大学では、それを選択する者が数人しかいないロシア語、中国語についても7千枚の答案用紙を用意した。すべての大学がこの方式をとったわけではなく、東京外語大ではロシア語、中国語についてはその受験希望者を予め届けさせてその数に応じた問題用紙を準備し、なおかつ彼らにも英語で受験することもできるようにした。ただし、東外大で事前届出方式をとったのは外国語のみである。『螢雪時代』1949年9月号による)。

受験生にとっては、入試の方式如何はいつの時代でも所与のものであって受けてたつしかない。したがってあれこれ口をはさむ余地はなかったが、『螢雪時代』誌が学力検査の教科数の少ない大学を「受け易い大学」などとしていたところをみると、5教科という学力検査は“負担”が重いと感じられたに違いない。実際、たとえば旧制高校の入試の歴史をふりかえてみると、学力検査を国語、漢文、代数、幾何、理科2科目、地理、歴史、外国語と当時の中学校のいわゆる主要学科目のすべてにわたって課するのは

入試科目選択状況 (1951年度)

科目名		社 会						数 学				理 科				
		一般社会	日本史	東洋史	西洋史	世界史	人文地理	時事問題	一般数学	解析 I	解析 II	幾何	物理	化学	生物	地学
国立 I 期 校	群馬大	38	32	4	20	18	32	54	26	88	48	38	30	56	52	20
	東大	14	68	12	48	24	22	12	14	92	72	22	19	20	52	9
	水産大	2	41	2	23	7	20	4	4	94	94	8	76	78	36	10
	阪大	6	33	1	11	5	37	8	8	86	74	32	48	54	64	28
	神戸大	3	38	1	10	6	27	15	—	52	31	17	16	15	61	8
	戸取大	3	35	1	12	6	29	14	—	38	53	9	38	29	29	4
	山崎大	6	40	1	15	3	24	11	2	47	36	14	2	20	53	18
	岡山大	28	46	4	28	18	48	24	18	78	54	44	38	46	80	14
	広島大	22	62	4	24	22	48	20	10	90	64	36	46	48	82	24
	高知大	6	35	2	13	5	23	16	7	37	36	19	21	22	47	8
	九大	34	42	4	30	22	36	30	18	92	42	48	32	58	76	22
	長崎大	17	26	2	18	5	16	16	4	45	38	13	23	23	39	15
	宮崎大	15	24	2	18	7	20	14	1	46	44	9	35	31	25	9
	宮崎大	7	30	1	10	5	35	12	2	47	34	14	12	17	55	15
	宮崎大	6	25	1	8	4	43	14	2	54	28	15	14	12	59	7
国立 II 期 校	室蘭工大	32	64	2	14	12	36	38	20	84	66	28	56	44	52	42
	帯広畜産大	11	27	1	6	11	29	15	10	64	13	12	30	50	82	16
	山形大	40	26	12	22	30	26	46	50	64	48	36	36	40	90	40
	千葉大	6	41	1	14	7	24	7	2	52	35	12	14	28	50	7
	東外大	7	38	1	20	7	13	14	—	—	—	—	15	20	55	10
	農工大	9	20	1	8	4	39	19	18	90	62	30	28	54	78	20
	電通大	36	46	4	22	8	32	52	16	86	58	40	80	56	34	30
	横浜国大	10	78	4	36	12	46	17	4	90	80	22	56	56	62	20
	富山大	7	37	2	10	6	28	10	4	48	29	19	14	27	48	11
	名古屋大	26	46	8	24	26	34	36	16	78	82	24	72	52	48	14
	岐阜大	7	30	3	10	6	30	14	14	44	13	29	14	16	62	8
	滋賀大	4	44	1	11	4	27	9	2	41	31	21	14	15	61	10
	京都工繊大	4	35	1	16	4	32	8	1	44	40	16	30	32	30	6
	大阪外大	4	39	1	20	5	22	8	1	50	37	12	—	—	—	—
	大阪学芸大	7	37	1	10	3	30	11	5	55	27	13	15	17	59	7
和歌山大	4	42	1	11	3	27	11	2	56	27	12	17	13	62	8	
愛媛大	5	35	1	11	7	32	11	4	45	29	22	23	21	42	10	
九工大	30	52	—	—	44	48	26	—	92	92	16	80	68	26	20	
佐賀大	7	31	1	9	6	33	13	4	44	38	13	17	17	55	9	
公立 大	横浜市大	7	37	2	15	5	26	7	2	46	31	15	11	21	61	7
	名古屋大	—	—	—	—	—	—	—	66	60	46	28	48	66	78	10
	岐阜大	7	37	2	10	7	30	9	3	38	46	13	24	27	45	5
	岐阜薬大	—	—	—	—	—	—	—	2	39	45	14	10	45	42	4
	三重大	9	41	1	7	4	27	11	16	90	68	26	42	54	80	22
	大阪女大	6	51	1	13	5	17	6	3	62	23	13	7	22	67	4
	浪速大	13	28	1	11	5	30	12	5	42	40	13	35	20	34	6
	神戸商大	6	39	1	10	3	27	13	2	44	26	17	—	—	—	—
	神戸外大	4	40	1	17	4	23	11	2	48	32	15	—	—	—	—
	姫路工大	4	38	—	—	15	32	12	1	48	42	9	32	23	35	6
	兵庫農大	—	—	—	—	—	—	—	3	47	34	15	12	18	63	4
	福岡女大	6	48	—	19	5	14	6	3	58	26	12	9	21	65	6
	熊本女大	12	38	—	14	8	21	6	23	39	19	19	7	17	47	—
	鹿児島大	32	42	4	28	14	52	30	6	84	84	26	58	60	60	14
	私立 大	東北薬大	12	48	6	36	26	44	24	38	74	50	40	24	66	78
立教大		—	22	8	24	—	14	32	25	25	25	25	12	28	36	24
東京農大		—	—	—	—	—	—	—	5	38	5	52	34	24	80	28
東京女大		2	59	1	18	6	12	3	1	67	17	16	8	26	60	5

- 注) 1. 『蝋燭時代』1951年8月号の「本年度各大学入試科目選択状況」により、筆者が計算した。
 2. 原表ではすべて各教科の合計が100%となる百分率で表示されているが、『蝋燭時代』誌記載の各大学の募集要項により1教科につき2科目選択させたことがわかっている場合については、原数値を2倍して掲げた(網の部分)。合計が100または200にならないところがあるが、原表のままである。
 3. 学部により選択科目数が異なっていたのにその区別のない信州大学と学習院大とはのぞいた。

受験生の負担が重過ぎるという理由で、1928年から検査科目数を減少させてきた経過があった。この旧制高校入試の場合、理科で課す科目、地歴（当時は社会科という考え方はなかった）で課す科目は学校側が決めたのであり、受験生が選択し得たのは外国語の種類のみであった。

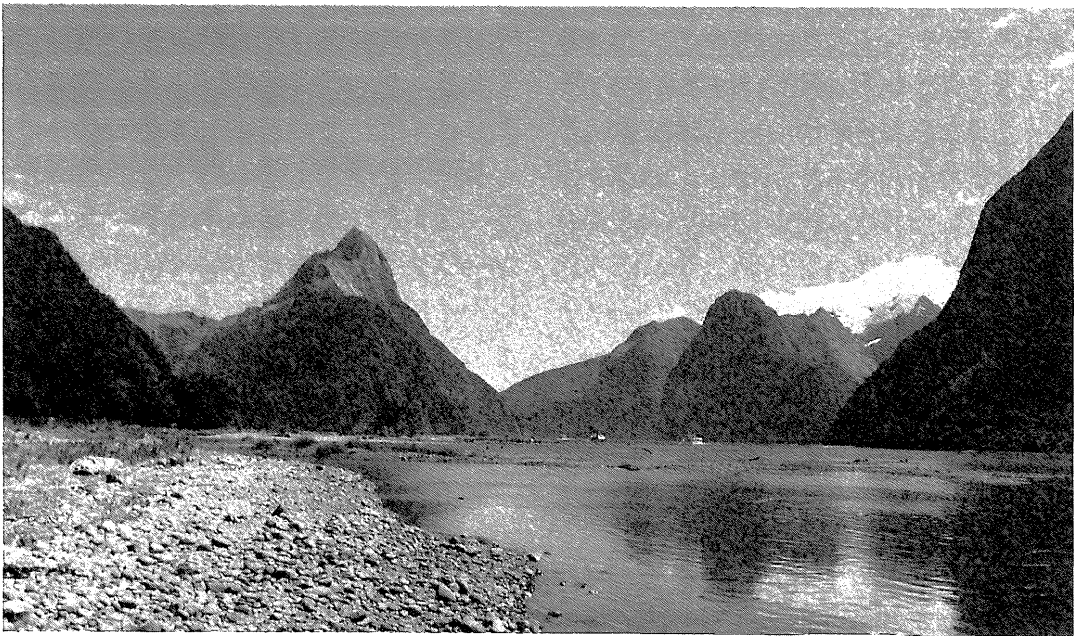
新制大学の受験生にとっては、学力検査が5教科にわたるのは仕方がないとしても、数学、理科、社会については希望する学部学科の如何にかかわらず、受験すべき科目を受験生自身が選択し得たことは歓迎すべきことであった。自分が最も得意と考える科目で受験することができたからである。

受験生が選択した科目

1951（昭和26）年の入試において受験生が選択した科目の百分率を表にしめす（残念なことに、各教科1科目制の時代つまり1949、1950年についてのこの種の統計を見つけることはできなかった）。この表の原資料は『螢雪時代』1951

年8月号に掲載されたものである。

1951年の入試の学力検査の科目数は、後述のように大学側の要求に押されて文部省側が折れ、社会、数学、理科については「2科目を選択させてもよい」とし、1科目にするか2科目にするかは大学の自由とした。したがって、この表に掲げた大学の中にもいくつかの教科もしくは全部の教科について2科目選択させた大学がある。たとえば群馬大学は社会、数学、理科の3教科すべてを2科目選択制とし、東京大学の文科は社会、数学の2教科を2科目選択制とした。表では、このように2科目を選択した場合の数値は、合計すると200%となる（合計が100あるいは200にならないところがあるのは、ここに掲げた科目以外に職業教育あるいは家庭科に関する科目を選択させているからであろうと思われる。多少のミスプリントもあるかも知れないが）。なおこの時期は現今とは違って、同一大学内で学部ごとに科目数を変えていた大学は少なかった。



この1951年は、2科目選ばせてもよいとされた初年度のためか、2科目を選択させた大学は意外に少なかった。なかには、佐賀大などのように、当初2科目課すと発表したのにその後地元の高校側の要求で1科目に変えた大学もあった。断りはこのくらいにして、受験生の科目選択の若干の特徴をみてみよう。

社会科についてみると、1科目制・2科目制に関係なく、日本史第1位、人文地理第2位というパターンが圧倒的に優位である（記載された58校——東大などの系を1校と数えて——中30校）。これにつぐのが1位人文地理、2位日本史というパターンである。受験勉強は暗記であり、歴史のなかでは日本史が憶え易いとも思っている者が多かったのだろうか。日本史、人文地理について多かったのは西洋史と時事問題とであり、1科目制の大学では前者、2科目制の大学では後者がやや多かった。当時の新制高校では必修科目であった一般社会がこれに次いだ。1科目制の大学では平均して7%弱に過ぎなかった。世界史、東洋史を選ぶ者は少なかった。

こうして、選ばれることが多かったのは①日本史、②人文地理、③西洋史、④時事問題、⑤一般社会、⑥世界史、⑦東洋史という順になる（2科目制大学では③と④の順が逆になる）。もちろん多少の例外はあった。東大文科（2科目）及び理科、東京女子大では1位日本史、2位西洋史であったし、山形大では一般社会を選んだ者が最多であった。

数学の場合にも選択には顕著な偏りがあった。ほとんどすべての大学で解析Ⅰを選ぶ者が1科目制大学33校中30校と最も多く、数学全体の半数近くを占めるのがふつうだった。2科目制大学でその1つに解析Ⅰを選んだ者は90%近くに

達している。解析Ⅰにつぐのが解析Ⅱで、これを選んだ者は1科目制大学で平均30%、2科目制大学では65%に達した。多少の例外もあり、阪大文系、岐阜薬大（いずれも1科目制）では、解析Ⅱを選んだ者が解析Ⅰのそれを上まわっており、東大文科、九州工大、鹿児島県大（いずれも2科目制）では、解析Ⅰと解析Ⅱとは同率であった。解析Ⅰ、Ⅱからやや差をおいて続いているのは幾何で、一般数学を選ぶ者は10%程度に過ぎない大学が多かった（例外的に一般数学を選ぶ者が多かったのは、名古屋市立大、山形大）。

理科の場合も偏りは顕著で、選択した者が多い順にあげると、生物、化学、物理、地学となっている。生物を選んだ者が最も多く、1科目制の大学30校中18校、2科目の大学18校中15校で過半数の受験者が生物を選んでいる。生物について多くの者が選んだのは化学で、1科目制の多くの大学では、生物と化学を選んだ者だけで70~80%に達している。しかし、多少の例外はあり、1科目制の大学でも阪大理系、九大文系、同理系、京都工繊大、浪速大、姫路工大などでは、物理、化学、生物がほぼ均等に近く分散していた。いずれの大学でも地学が最も少なく1科目大学では10%以下であるが、これは地学を開講している高校が少ないためでもあろう。

しかし2科目制の大学ではかなり事情が変わってピークが生物、化学、物理の3科目に分散する傾向がみられ、1科目制の大学にみられた生物への集中は著しく緩和されていた。あとでのべるべきことだが、大学側が2科目を主張したねらいはこの点である程度実現をみたわけである。

ちなみにいえば、5教科5科目自由選択制となった1988年の共通第1次学力試験における学

力検査科目の選択状況を見ると、社会科については日本史、地理が最多で世界史がこれについており、科目選択のパターンは初期の大学入試のそれに似ている。しかし理科にあっては生物が最多とはいえ物理、化学とあまり差がなかった。これは、理科にあっては2次試験で課される科目と連動しているからで、戦後初期の選択パターンと単純に比較することはできない。

外国語の位置づけ

大学側は、ありていにいえば特に理工系学部は、入試の学力検査科目の自由選択制に批判的であった。とくに、数学、理科について1科目しか選択させていないことへの不満は強かった。

大学側の要求とそれへの文部省等の対応はのちのべるが、文部省が5教科5科目自由選択制にこだわりこれを強く主張したのは、その根底に大学入試によって下級学校（この場合は新制高校）の教育をゆがめてはならないと考えたからであった。つまり文部省は、高校が社会、数学、理科については自由選択制を実施していること、これら教科においては必修は1科目のみであることを重視していたのである。

しかしこの議論をつきつめると、新制高校では外国語は必修ではなく選択制の教科となっているのではないかという論点に行きつく（外国語は、現在も選択制の教科である）。そこで今回はまず、大学入試の学力検査における外国語の位置づけについて考えてみる。

1951（昭和26）年度入試における各大学の学力検査の教科・科目中の外国語の扱い方を旺文社の『昭和26年度 全国新制大学受験年鑑』（『螢雪時代』1951年1月号附録）によって調べてみると、以下のようなことがわかる。

まず4年制大学についてみると、国立及び公



立大学では、外国語を課さない大学はなかった。英語しか出題しない大学はむしろ少数派で、英語、ドイツ語から1科目選択させる大学が多数派である。このほか、英語、ドイツ語、フランス語、あるいはさらに中国語などを加えた複数科目から1科目選択させる大学も少なくなかった。

私立大学入試における外国語の位置も、全体としては国公立大学のそれと似かよっていたが、こまかく調べると若干の違いがみられた。記載された105校（文部省の統計では1951年には私立大学は106校あったとされている。のちに1校加わったのであろう）の中の3校（いずれも女子大）は書類選衡が主で、学力検査を課していない。他の大学はすべて学力検査を課しているわけだ（ただし、この段階で学力検査科目未公表の大学が10校あった）が、このうち専修大学、日本体育大学、東京家政大学、麻布獣医科大学の4校及び神奈川大学の工学部が外国語

を課していなかった。

以上のほか、大妻女子大は3教科のうち1つについては国語、英語のいずれかを選択させる方式を、また嵯山女学園大学は一般家庭、英、国、数、社、理の6教科中から3教科を選択させる方式をとっていた。これら2校の場合には、選択の仕方によっては外国語を受験しなくてもよかったわけである。

短期大学（および短期大学部）についてみると記載された132校（うち28校は学力検査科目未定）のうち、書類選衡のみ4校、外国語を全く課さないか、あるいは選択の仕方によっては外国語を受験しなくてもよい学校は11校であった。この11校中10校が私立、公立は1校のみであった。また11校中10校は女子短大である。なおこの段階で入試科目未定の短大のなかには中京女子短大のように前年度に外国語を課さなかった学校もあるので、外国語を受験せずに入学できる短大はここにしめした数より多かった可能性が大きい。

以上を要約すると、入試に外国語を課さないか、あるいは選択の仕方によっては外国語を受験しなくても済む大学・短大は、国公立大学にはまずないとみてよく、私立大学・短大の場合にはていねいに探すと数校はみつかる、という程度だったということになる。高校では選択制になっている外国語が大学入試ではほとんど必須になっているのはなぜか。

大学側の言い分ははっきりしている。外国語を習得していることが大学教育には不可欠だと大学が考えているからである。入学後の大学で外国語学習が必修となっていることも根拠にされる。しかしこうした考えに矛盾がないわけではない。現代日本はもはや明治時代ではないから、外国語で授業が行われることは、国際キリ

スト教大学など特別な場合をのぞくと、ほとんどない。入学当初から日本語で書かれたテキストや参考文献が全くないなどという科目もほとんどなくなってしまった。そのうえ、いわゆる第2外国語は入学してから初歩から学ぶのである。第1外国語を同じ方式で学ばせてはいけない理由はない、など。

他方、高等学校で外国語が選択制の教科とされている理由も、それ程ははっきりしたものではない。高等学校学習指導要領の文面では選択制の教科ではあっても、外国語はほとんどすべての高校で必修とされているので、高校生にとっては必修教科以外の何物でもない。わが国の中等学校は、一部の実業学校や第2次大戦下の高等女学校など特別な場合をのぞくと、ラテン語・ギリシヤ語など古典語こそ課さなかったがつねに近代外国語を必須教科としてきた。近代外国語を学ばせることは中等教育の特徴のひとつとみなされている。少なくともそう考えることについて広範な合意ができていたといつて過言ではない。

理科、社会、数学の学力検査を2科目制にすることにこだわった文部省も、外国語を課すことについては初めから特段の説明をしていない。高校側から、外国語を課すことは高校教育をゆがめるから反対だなどという声が出されたという話もない。

外国語が大学入試に課されてもそれが問題とならず、むしろ課さない大学があることを奇異に感じたりするのは、高校で本来必修教科とされて然るべきなのにそうならないからに過ぎないと筆者は考えている。しかし、社会、数学、理科を2科目選択制にすることについては、外国語とは異質の問題があった。